

# 2015 年

## 成都学会報告書

2015 年 11 月 2 日～11 月 7 日

作成者

群馬大学大学院

理工学府電子情報部門 小林研究室所属

修士 1 年 澁谷 将平

学会基本情報

学会：The IEEE 11<sup>th</sup> International Conference on ASIC

場所：中国 成都 Wang jang Hotel

日程：2015.11.2～2015.11.7

11/2 入国

11/3～11/6 学会開催期間

11/3 成都観光

11/4～11/6 学会発表

11/7 帰国

## 学会

発表内容：Shohei Shibuya, Yutaro Kobayashi, Haruo Kobayashi, "High-Frequency Low-Distortion Signal Generation Algorithm With Arbitrary Waveform Generator", The IEEE 11<sup>th</sup> International Conference on ASIC, Chengdu, China (Sep. 3-6, 2015)

発表日：2015年11月6日（木）Session B6：Wireless Communication

今回の学会は IEEE の主催する学会とのことで、レベルの高い発表になると思い緊張しながら望みました。最終日で発表ということもあり緊張がピークに達した状態で発表になりました。結果、発表では時間オーバーやカンペを見ながらの発表など準備不足を痛感し反省することになりました。発表以外では招待講演されている方々のプレゼンなどを見て（発表内容はあまり理解できていませんが・・・）、プレゼン資料や発表の参考になるものがありました。特に発表中で自分の書いた本を宣伝していた方などが面白かったです。



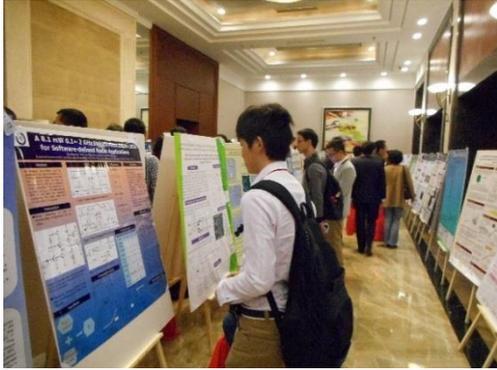
発表時の写真

もう少し準備しておけば良かったです



採択率のスライド

Oral 31%で全員よく通ったなあ…



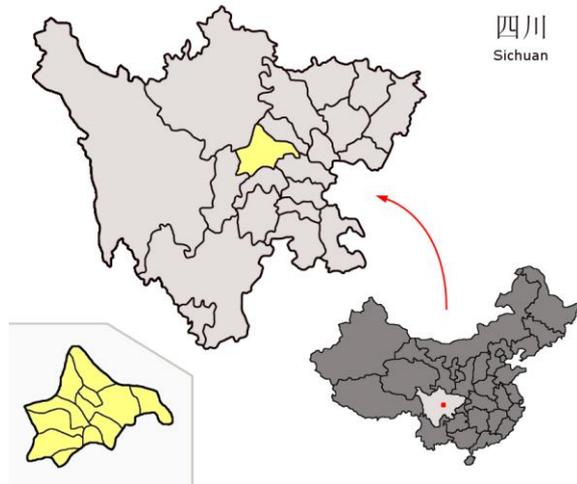
### ポスター発表会場の様子

会場が狭すぎてポスターを見るのに一苦労でした。(通路が大体人2~3人通れるくらいの幅)

## 成都観光

### 成都市

成都市（せいとし/チョントウーし、簡体字：成都市、拼音：Chéngdū、英語：Chengdu）は、中華人民共和国四川省の省都であり、副省級市。豊かな成都平原の中にあって古くから『天府の国』と呼ばれてきた。唐の時代から蜀錦を産出するため錦城の別称を持ち、また芙蓉の花を市花とするところから蓉城の別称ももつ。歴史時代においては、三国時代に蜀の都となったほか、4世紀初頭、巴氏の李特が占領して成都王を称し、成漢が建てられた。五代十国時代には前蜀、後蜀の都となった。(wikipedia より)



成都観光では

- 成都大熊猫繁育研究基地（パンダの保護研究施設）
- 武侯祠（三国史の聖地、諸葛孔明の廟）
- 青羊宮（道教の寺院）

をたずねました。



### ジャイアントパンダ

カメラ目線いただきました  
日本の上野動物園よりも数がとても多く、活発に動いていた印象。カワイイ



### 黄金のパンダ像

研究基地内にあった像  
何の根拠も無いがお金がたまりそう。



### パンダの赤ん坊

なんとなくたれパンダって  
キャラクター思い出す。  
カワイイ



### レッサーパンダ

中国語で「小熊猫」英語で「red  
panda」  
個人的にこの旅のベストショット。カワ  
イイ



### 成都料理

成都市内のお店での昼食  
成都のある四川料理では麻辣（マラー）味。つまり唐辛子と花椒（中国山椒）による辛さが特徴。

激辛ではあるが美味しいので無問題。  
ただ火鍋が食べられなかったのは少し心残り...  
これに限らず料理は旅全体を通して美味しかった。



### 漢昭烈皇帝之陵

三国史、蜀漢の皇帝として有名な劉備玄德のお墓（他の場所の説もある模様）

この先が古墳みたいになっており周囲をぐるりと一周してきました。



### 桃園

三国史、蜀における劉備玄德、関羽雲長、張飛益徳の像



### 青羊宮

青羊宮内の建物  
青羊宮は成都内で最大の道教寺院

## 今回の学会を終えて

中国、どこか海外に行くことや飛行機に乗ること自体が初めてで知らないことだらけの海外研修でしたが学ぶところの多いものとなったと思います。特に交通事情や、物価の違いなど実際に体験してみて衝撃を受けました。発表だけでなく、日本語が通じない場において英語の苦手な自分がコミュニケーションを取れるのかどうかといった点で大きく不安を感じていましたが身振り手振り、単語の羅列だけでも伝わるものだとわかり、コミュニケーションに大事なものは技術だけでなく、伝える努力なのだと感じました。

今回の海外研修で得たものは、これからの生活の中において自分の中の大きな糧になるものであるとして、報告を終えたいと思います。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった小林先生、現地において多大な協力いただいた林先生をはじめとする諸先生方、ならびに今回同行し共に学会発表を行った小林・高井研究室の M1 およびサポートしてくださった先輩方にこの場を借りて感謝いたします。ありがとうございました。

群馬大学理工学府 小林研究室修士1年 澁谷 将平

**謝辞** 本学会への参加にあたり、公益財団法人 NEC C&C 財団より国際会議論文発表者助成事業により渡航費、学会費等、資金面での助成をいただきました。心より感謝の意を表します。ありがとうございました。

